

## 今日の黙想のてびき

週日聖書日課 詩編 16  
2026年4月15日(水)

### ◆文脈

- この詩編16編は信頼と賛美の詩編です。喜びにあふれる豊かな人生の源である神に、賛美を交えながら、個人の信頼を言い表します。
- 全体の構造は自分の語りと神への告白・賛美を織り交ぜたシンプルなものです。
  - ・1-2節：信頼に基づく祈りと告白
  - ・3-4節：異教崇拝からの決別
  - ・5-6節：「受くべき分(嗣業)」である神への賛美
  - ・7-9節：神と共に生きる確かさ
  - ・10-11節：神の救いと喜び

### ◆あらすじと説き明かし

- 1-2節：「守ってください」には苦難の状況も嘆きも伴わないので、祈願の形をとった信頼表明といえそうです。「逃れました」も具体的な苦難・困難からの保護というよりも、神に信頼して生きること自体を意味すると思われる。「主のほかに幸いはない」がこの詩の主題です。
- 3-4節：イスラエルの民、そしてその指導者達に異教礼拝から離れるようにと忠告しつつ、ただお一人の神に対する自分自身の忠誠を告白します。
- 5-6節：約束の地の分配に思いをはせつつ（「くじ」は土地の分配のため[民数記26:56]）、主ご自身が自分が受け継ぐもののされている幸いを語ります。（土地が割り当てられなかったレビ人へは主ご自身が嗣業とされました。民数記18:20、申命記10:9）。
- 7-9節：絶えず主を目の前に置くことで主の諭しと戒めのうちに生きる確かさを歌います。主の御心に生きるところに喜びと平安があります。
- 10-11節：最後に、自分の魂を死に渡さず、命の道を示してくださる主こそ満ち溢れる喜びの源泉であると讃えて終わります。
- レビ人には主ご自身が嗣業とされたのは、主との関わり、主に仕えることそのものが受け継ぐべき恵みであるという意味です。この詩人もまた信頼し守ってくださる主との親しい関係の中に幸いを見出しています。
- 旧約には復活信仰はほとんど見られませんが、この第10節は使徒言行録2:31（ペンテコステのペトロの説教）、13:35（アンティオキアの会堂でのパウロの説教）で引用され、キリスト教会においても主イエスの復活の預言として理解されるようになりました。